地方自治ここにあり　首長インタビュー

対話を大切にする町政を
若者のアイデイア 高齢者の経験 生かすまちづくり

日高川町　久留米　啓 史　町長

久留米啓史日高川町長

和歌山県地域・自治体問題研究所では、年２回（原則）和歌山県内の町村長を訪問して、地域の課題とまちづくりについて本音のお話をお聞きしています。シリーズ「首長インタビュー」今回は、今年５月に行われた町長選挙で、無投票で初当選を飾った日高川町長久留米啓史さんにお話を聞きました。インタビューは当研究所の鈴木裕範理事長です。

「私たちを忘れないで」胸に響いた奥地住民の声

鈴木：当選後のインタビューでは、日高川町の広さを改めて実感したと答えておられました。

町長：はい。川辺町で育ち、町の職員を長くしておりましたので、川辺の谷々とかは大体、頭に入っているのですが、町内を回ってみると、地図上で見る感覚よりも相当広いです。寒川に出張所があるんですけど、本庁舎から距離にして40㎞余りですが、地域性が違います。川辺は、果樹、ミカンなどを中心に発展してきました。中津とか特に美山の方に行けば、林業ですよね。非常にもうかった時代もありましたが、今は木材需要の関係で価格が暴落し、非常に厳しい状況です。１つの町に、これだけ大きな特色があります。この違いは、施策の中でも違いになります。

鈴木：平成の市町村合併で、町域が広くなり、周辺部では不安の声を多く聞きました。

町長：立候補にあたって日高川をさかのぼり、一歩、谷へ入りますと、「もうここではうちだけしか残ってないよ」っていうお年寄りもおりましたし、そういった人たちが「ここをほらんといて」「忘れないでね」って言われるのがきつかった。この人たちのために、どうしてあげればいいのかなって。

山深い地にも人の暮らしが。寒川地区で

鈴木：町政担当の原点になる言葉ですね。ところで、増田リポートでは、日高川町は大変厳しい、見通しが示されました。将来的には、消滅の可能性が高い自治体に分けられていました。

町長：そうですね。増田リポートの指摘がなくても人口減少は町の課題で、５つの政策目標でも最優先にあげています。日高川町は、

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2017年 9月号
2017年8月25日発行　第291号　（月300円）

目　次

地方自治ここにあり　首長インタビュー
日高川町　久留米啓史町長…… 1
高齢化の中で、地域から、住民自治を新たに創造する
橋本市いきいき長寿課課長補佐　石井　義光さん…… 5
地域と認知症フォーラム第2部　パネルディスカッション②
認知症の方を地域で支えあうためにできること …… 8
2017年度和歌山県地域･自治体問題研究所総会
新事務局長に西岡　敏さん …… 10

町の中心部土生地区　診療所・スーパーなどが集中

平成17年に合併しましたが、ちょうど国調の年でその当座１万１３００人ほどあった人口が、平成27年の国調では９７７０人で、約１５００人程減っているんです。年に１５０人減っていることになるのですが、どういうことか推察すると、今まで年に１００人以上生まれていた子どもが、60人しか生まれていないんです。一方で、亡くなる方が、年間１８０人くらい。あと、子どもたちが大きくなって、高校を卒業し大学へ行ったり、転出される方が、転入される方よりも30人ほど多いんです。その結果、１５０人くらいずつ減っていることが分かっているんです。そう考えると、生まれてくる子どもたちの60人、これをいかにキープし、人口を維持するかに尽きると思っているんです。

鈴木：高齢化率はどれくらいですか。

町長：高齢化率は日高川町全体では34％ぐらいですけれども、美山では47％、中津は40％、川辺で28～29％です。

鈴木：なるほど。

「戻って来いよ」息子・娘を送り出す言葉に

町長：人口縮小を行政、住民みんなで考えざるを得ない。私も高校を卒業して一旦、大学進学で外へ出て行ったのですが、大学へ行くときに、常々親から、必ず戻ってこいという指令を受けて出ていった記憶が、鮮明に残っているんですよ。だから、町民の方にも「皆さん、悪いけど子どもたちに、必ず戻って来いと言って出してください。どこへ行ってもいいよって言ったら、戻りませんよ。」と言っているのです。実際、私も息子には、「悪いけど戻って来いな。できたら近くで仕事があるようなことを勉強しておいで」と言ったら、専門学校へ行って、今、地元でリハビリの仕事をさせてもらっている。でも娘には、戻ってこいとは言わずに、行きたい学校へ行けばと言ったら、戻ってきてないんですよ。だから、地域で、子どもが戻ってこないとか、年寄りばっかりになったと言う前に、自分たちで子どもを戻すような努力をしてくださいって、よくお話しているんです。

鈴木：大事なのは、帰ってきて、ふるさとで自分は一生をここに賭けてみようっていうふうに思わせる、そういう可能性とか、希望とか、夢とかを見ることができる場所でないと、駄目だと思うんですね。と考えると、やっぱり魅力あるまちづくりです。具体的な人口増、維持対策ですが。

町長：やはり、仕事がなかったら、食べていけない。食べていけるように、最低限、仕事がなければいけない。しかし、仕事を日高川町内だけで求めるのも、なかなか難しい話です。今、若い人は、製造業などの仕事だけでなく、ソフト的な仕事というのも望むでしょう。そのソフトの仕事であった役場や農協、銀行が、合併統合等々で、門が狭くなってしまい就職しにくくなっている。学校も生徒数が減って統合され、どんどん教職員数も減っている。工場は、いっぱいあるんだけど、地元出身者で働いている方は1割、多いところで2割程度でしょうかね。やはり、日高川町だけで考えるんじゃなしに、最低でも日高圏域で仕事場を求めないと、和歌山、田辺まで行かなければなりません。今では、和歌山、田辺でも通勤可能ですから、仕事は求められるかなと思います。職場の魅力は地元になくても、生活していく上で何か魅力をつくってあげられればなって思うんです。

鈴木：徳島県の神山町、島根県の海士町、長野県などでは、新しいビジネスをつくり出す取り組みが生まれています。ＩＴ関連もある。そういう意味で言えば、この日高川町の持っている、潜在的なものも含めた資源価値がたくさんあると思われます。起業、創業を応援する若者対策みたいな仕組みというのは、どうなんでしょうか。

南山工業団地に増設されたチョコレート製造工場

歴史と文化の町の看板と道の駅 San Pin 中津

地元の資源で産業を移住者と魅力磨き

町長：多分、日高川町内の中にも、うまく加工すれば、全国展開できるような原石的なものは多分あるんでしょう。ただ、ずっと地元にいる私たちが、気付かないことが多々ある。今Ｉターンとか移住とかいろんな方が年に10数名、世帯数で８戸、10戸ぐらい、入ってきてくれているんですよ。そういった方々のご意見も頂きながら、それを磨き上げていくような産業を、ちょっと時間はかかると思いますが、地道につくりあげるしかないのかなっていう感じですね。

鈴木：移住してくる方々はいま：

町長：以前から中津村の方で「ゆめ倶楽部21」という団体が、活発に活動して、そこへ行政も絡んで移住とか、農家民泊とか、体験型観光であるとか、そういったことを積極的に展開してくれております。去年の実績でいくと、大体９世帯13人の方が日高川町に移住していただいているんです。

　空き家が増えているので、空き家を地域資源として、積極的に移住する方に提供したりしております。ただ、所有者の意向もあって、空き家の確保と活用はなかなか難しいのも事実です。

鈴木：子育て対策は如何でしょう。

町長：医療費は、18歳になって年度末まで無料です。給食費の無料化は、組合立の学校の関係から難しい部分があって、無料化という形にはなっていません。それで、対象の方に、町内で使える商品券をお配りし助成する形で、ここ２年ほど対応しています。

鈴木：魅力のあるまちづくりということについて、町長は、どんなふうにお考えでしょうか。

町長：魅力って何なんだろうなっていうのを改めて考えてみると、普通に考えたら、田園風景、星がきれい、蛍が飛ぶ、自然が豊かっていう、ありきたりなことだけど、ほかにないものといったら、そんなものかっていうイメージです。

鈴木：実は自治体問題研究所では、この２年ほど、和歌山県内に移住してくる若い世代を中心とした調査を行ってきました。そのなかで、若い世代があげた魅力に、自然や食べ物などのほかに、コミュニティがありました。自分の居場所がある、居心地がいい場所です。

町長：そこに住んでいると当たり前なことが、案外と外から見たら魅力があるんでしょう。ですから、地元で育った若い人たち、移住等々で来られた方、地域おこし協力隊の方もおりますので、そういった若い人たちと、日高川町の魅力って何か、そこを伸ばす方法は何か、じっくりと練ってみたい。良ければ、それを前に出せばいいと思いますね。

若手職員・女性職員と対話

鈴木：住民みずからが地域の魅力を考え、磨くような場を期待します。ところで、久留米町長は、職員の皆さんへの協力、期待を訴えていました。若い職員の意欲、情熱、あるいはアイデアを引き出し、それをどういうふうに生かしていきますか。

町長：基本的に職員は、非常に真面目で一生懸命、何事にも取り組もうとしています。昔から日々のコミュニケーションが大事だと思っています。全体で１８０人ほどの職員がいるのですが、本所とか両支所の職員ぐらいは、機会を見付けて、ふだんの会話をしながら、どういうことを今思っていて、どういうことをしようとしているか、繰り返し話し合っていくことによって、彼らはもっと頑張ってくれるだろうなっていう思いがします。

鈴木：定期的に、町長と若い世代が語るような、町長と女性職員が語るような場を。

町長：つくりたいなとは思っています。ただ、身構えさせないために、少しコミュニケーションを先に取る方がベストかなと思います。ある程度コミュニケーションが取れた中で、一度集まって、このことをみんなどう思うって投げかけ、自分らで消化して、また、集まって話をする方がいいかなという気はするんです。

鈴木：女性職員はいま、どれくらいおられますか。

町長：保育士さんも多いですから、女性職員は４割程。最近の傾向として、採用試

日高川町役場の執務風景

験をしたら、成績の上から採れば女の子の方が、採用される確率が高いです。

鈴木：つまり、女性職員は増えていると。

町長：増えていますね。

鈴木：町長が進めていく、まちづくり、やはり長い時間生きることになる若い世代の活躍が大事ですね。

町長：それは大事ですよ。

意見を聞くっていう話のレベルでも、若い人の考え方っていうのは必要ですし、住民さんの中に飛び込んで、何かまとめていくにしても、若い人たちがどんどん中へ入っていって、そこで事を進める方が、将来楽しみだなっていうふうに思いますね。

鈴木：最後に、向こう４年間、是非実現していきたいというふうにお考えになっていること、どういった町政を推進していくのか、お伺いできたらと思います。

高齢者が元気で活躍するまちを目指して

町長：一番最初のお話に戻るんですが、私、無投票当選をさせていただいたっていうことで、このこと自体重く感じているんです。投票していませんから、私を支持してくれた方がどれだけいるのか、私の出した５項目が、どれだけ皆さんに支持されているのか見えないんです。皆さんが、私を応援してくれているという考え方もありますが、対抗馬がいないので、選択肢がなかったと言われたら、支持者がいないということもあり得ます。自分がなった以上、４年間どうするのかというと、掲げた５つのことを、できるだけ実現に向けて前へ転がす。できること、できないことはあると思うんです。ひょっとしたら５つともできあがってないかも分かりません。でも、前へ転がすという行為を誠実にすることが、私のこの４年間に与えられた責務かなというふうに思っています。そういった意味で、この４年間を一生懸命、住民の皆さんのために尽くせればなと思っています。その中で、１つだけ気になるのが、高齢化率が高くなって、65歳以上の方がもう３分の１を超えているという現実ですね。でも、65歳以上の方でも、元気な方がいっぱいおります。若い人に頑張れという以前に、人口に占める割合の大きい元気な高齢者の皆さんに、町のために動いてもらわないと、もったいないなという気がします。この人たちに、何とか元気に活躍してもらう場をつくっていきたいなと、今、思っているんです。

鈴木：なるほど。

町長：私、社会教育もしていた経験もあるし、保健福祉の方でも長く勤務しておりましたので、元気なお年寄りっていうのは、やっぱり何か仕事をしながら、社会貢献的な、ボランティアであったり、文化活動であったり、スポーツであったり、いろんなことにチャレンジされている方は、元気に年を重ねますね。そういう人たちをつくらないと、こんなちっちゃな町では、医療費がもちません。社会保障費ばっかりになって、したいことができなくなります。できるだけその人たちも元気で、病気や介護の期間をできるだけ短くしていくような手立ては、人口を維持するという意味でプラスになるので、そこに力を入れたいなと思っています。

鈴木：今日は、若い世代が魅力を感じる町をどうつくるかを、重点的に伺ってきましたが、町長がいま言われたように、団塊の世代も含めた高齢世代を、人的資源として活用することは重要です。どのように高齢者の出番、活躍の場をつくるかですね。

町長：はい、そうです。

鈴木：社会教育の現場でありコミュニティの拠点でもある公民館の活用はどうでしょう。

町長：公民館というのは、社会教育における学校的な存在です。行政の各課が進めている事業は、社会教育上も課題、地域課題でありますので、単純にカルチャーになるのではなくて、地域課題をもっと取り入れた社会教育、生涯学習であってほしいと思っています。それが公民館だというふうに私は認識しています。

鈴木：人口減少、少子高齢化、地域コミュニティが変わる中で、学校とともに公民館は大切な拠点だと思います。地域を活発化する場として、是非位置づけていただきたいと思います。長時間になりました、今日はありがとうございました。